

E. 学習・研究環境の改善

⑤その他

●兵庫教育大学 学校教育研究科

「小学校英語活動指導者・研究者の育成」の事例 <人社系>

具体的に何を実施したのか

学生の学習・研究の支援を行うために、特命教員を雇用した。また、学習環境の整備・充実を図るために、小学校英語活動プログラムを履修する学生専用の学習室として「小学校英語ラボ」を設置した。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

特命教員が授業外に学生の指導を行い、研究力や英語運用力の向上を図った。また、小学校英語ラボに、学生用のPCを設置したり、教材や関連文献を充実させたりすることで、学習・研究環境の整備を行った。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

特命教員の配置や学習環境の整備については、学生からも高い満足感を示す調査結果が出た。また、ラボを中心として、それぞれの学生の所属コースを横断するような学習コミュニティが形成されており、修士課程における教育研究を活性化させる効果につながっている。

●愛媛大学 医学系研究科医学専攻

「地域・大学一体型先導的研究者育成システム」の事例 <医療系>

具体的に何を実施したのか

従来、大学院生が講座の枠内で活動を行っていたのは、研究費や成果発表にかかる費用を講座に完全に依存していたことも大きな理由である。そこで、大学院生提案型プロジェクト助成では、大学院生が研究計画／予算計画を立て、そのプランを大学院医学専攻学務委員会に提出、学務委員会委員12名前後の前でプレゼンを行い、その結果、平均競争率約2倍を勝ち抜いた大学院生に研究費60万円（初年度のみ90万円から30万円と配分額に差を付けた）を支給した。ここでも、コース制教育を推進するために、コース単位で候補者の順位付けをした。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

自ら研究を設計し、長時間にわたるヒアリングに耐え、成果報告を行うことを通じて、予算獲得の難しさ、研究遂行への責任感、自主独立の満足感・達成感をえてもらうよう、配慮した。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

この制度は、ラボ・ボーダレス／ウォールフリー教育の実現の推進力になったばかりではなく、自ら研究計画を立て、多数の教員の前でプレゼンをし、一般の学会ではあり得ない（舞台裏も知られた上での）厳しい質問を切り抜けるという経験を与えたこと自体が大変優れた大学院教育であったと自負している。大学院生提案型研究プロジェクト助成の成果については、成果報告集を翌年度に編集している。